『雪国』の日本語らしい表現とその中国語訳

李　国棟
広島大学外国語教育研究センター
何　薇
趙　英来
武内真弓
広島大学大学院文学研究科

キーワード：「ように」、「ようだ」、「そうだ」、オノマトペ

川端康成の『雪国』には、感覚性表現を中心に数多くの日本語らしい表現が見られる。これまで、いろいろな角度から『雪国』とその英訳について対照研究をおこない、英訳が様々な工夫を施したにもかかわらず、結局それら日本語らしい表現にはうまく対応できなかったことを明らかにすることができた。それでは、中国語訳はどうであろう？うまく対応できるのであろうか？

この問題に答えを出すことには、念を押すまでもなく日本文学の本質を究明する上で重大な意義があるが、それと同時に、日本語教育ないし外国語教育上の意義も大きい。外国語教育は決して教授法の研究やリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングのトレーニングだけではない。より本質的、よりレベルの高い外国語教育はまさにこのような文学作品の翻訳およびその翻訳上の差異に対する語学的・文化学的な吟味から生まれる。これが中国人と日本人で構成されるわれわれ執筆者の痛感したところである。

第1章　「ように」

『雪国』には、「ように」が全部で152例用いられている。山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』[1] には、「ように」の終止形「ようだ」の意味を「その様子が表れているが、そうとは断定できない」とし、「①様子から想像できるが、そうとはっきり断定できないという話し手の心情を表す。不確かな断定」「②その物事の持つ属性・状態と同じ属性・状態のあることを示す。『例え』『比喩』『比況』という意味を表す」「③説明するために引かれた例であることを示す。例示」「④その状態が現れていることをいう」と解説しているが、『雪国』に出現する「ように」は大多数が②の「比況」に属するといってよい。そして、そのうちのほとんどは忠実に訳出されている。しかし、訳出されていない例も何例かある。これはなぜだろうか？ 単に翻訳するときに漏らしてしまったのか、それとも何か特別な事情によるものなのだろうか？ 本章では『雪国』の日本語原作とその中国語訳の比較対照を通じて、その原因について考察してみたい。

1．直訳不可能な「ように」

「そう？」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないで手をひくように階段を上って行った。(p.19)

“是吗？”女子一把攥住他的指头，没有松开，手牵手地登上楼去。(p.8)

ここの「ように」は訳出されていない。仮に中国語で直接それを“好像”に訳すと、「“是吗？”女子一把攥住他的指头，没有松开，好像手牵手地登上楼去。」となる。しかし、この訳文は手も指も、何も引いていない状況を表現しており、原文の意味に反する。日本語としては、「手をひくように」の「ように」は何も不自然ではない。なぜなら駒子が引いているのは「指」であり、「手」を引いているわけではないからである。逆に、「ように」を使わずに「手をひいて階段を上って……」と表現すれば、実際の状況にそぐわなくなる。しかし、中国語では「ように」を訳出せずに“手牵手地”としか言うことができない。それは、引いているのが指であれ手であれ、実際に「引いている」からである。

（駒子は）でも直ぐに泣き止むと、（島村に）自分をあてがうように柔かくして、人なつっこくこまごまと身の上などを話し出した。(p.40)
但是，她很快停止抽泣，紧贴着他，温柔、和蔼地细说起自己的身世来。(p.21)

この例も上記と同じく、“好像紧贴着似地……”などと訳すと、実際には“紧贴”していない、つまり駒子と島村の身体は離れていることになるが、原文では二人の身体は触れあっているのであろうから、原文の意味とずれが生じることとなる。

山袴の腰をひょいと捻(ひね)って、娘が稲の束を投げ上げると、高くのぼった男が器用に受け取って、扱(しご)くように振り分けては、竿に懸けていった。物慣れて無心の動きが調子よく繰り返されていた。(p.125)
姑娘轻轻地扭动了一下穿着雪裤的腰身，把一束稻子抛了上去，高高攀在晾晒架上的男子，灵巧地接住，连捋带理地把它分开，挂在晒竿上，专心地重复着熟练而麻利的动作。(p.74)

「扱くように」を“连捋带理似地”と訳すと、読者はどういう情況を表しているのか理解できなくなる。原文は、稲穂の束をふたつに分けるときに、稲穂どうしがすれあう様子を「扱くように」と表現したものであろう。しかし、“连捋带理似地”とすると、実際には稲穂どうしがこすれあっていないことになり、どのように分けているのかがわからない。情景の描写が成り立たなくなる例である。

「……私酔ってる？」と、倒れるように鏡台の両端をつかまえて覗(のぞ)きこむと、しゃんと裾(すそ)を捌(さば)いて出て行った。(p.138)
……我是醉了吗？”驹子打了个趔趄，一把抓住梳妆台的边，定睛照了照镜子，然后挺直身子，撩了撩衣服的下摆就走出去了。(p.82)

訳文の“趔趄”は「よろける」意味であり、「倒れるように」という原文の情況を反映させているものの、「ように」に相当する中国語はない。人間が倒れるという意味を表せる中国語には“倒”があるが、ここで仮に“驹子像倒下来似地，一把抓住梳妆台的边，……”と訳すと、駒子の身体は倒れていないことになる。しかし原文は、駒子が酔ってふらふらとして、立った状態から、速い速度で畳の上に置かれた低い鏡台へと手を伸ばし、その両端をつかんだ状態を表しているのだから、やはり駒子の身体は上から下へと移動しており、いわば「倒れて」いるのである。

「女一人くらいどうにでもなりますわ。」と、葉子は言葉尻が美しく吊り上るように言って、島村を見つめたまま、……（p.142）
“一个女人总会有办法的。”叶子盯住岛村，非常优美地提高尾音说：……（p.84）

ここでは葉子は本当に言葉尻を高くあげて言ったのであるが、彼女が意識せずに言ったためか、あるいは意識が弱いために、その状況が「吊り上る」という自動詞で表現され、さらにその後に「ように」を補ったのではないかと思われる。しかし中国語では、実際に言葉尻が「吊り上がった」のであるから、比況をあらわす“像”などを付け足すことはできない。

上述の５例がもし「比況」の用法であるならば、中国語で「比況」を表す“好像”“仿佛”“宛如”などを用いて訳せるはずである。中国語に訳すことができないということはすなわち、これらの例が「比況」ではないことの証明である。前述したとおり、「ように」は「その事物の持つ特性・状態と同じ属性・状態のあることを示す」意味があり、すなわち状態化の機能を持っている。この角度から見ると、上述の５例における「ように」はすべて動作の状態化を表していると理解できる。しかし動作を状態化するときに、中国語では「ように」のような言葉を使う必要がなく、むしろ“地”“得”“着”などの助詞を使うことが多い。動詞自体が状態を表す場合もある。実際に、これが以上の５例の中国語訳の「ように」が不訳となっている理由であり、この５例の中国語訳によって、ここの「ように」は非常に日本語らしい[2]ということが明らかになるのである。

２．あえて中訳されなかった「ように」

『雪国』には、「ように」を中訳していないものの、工夫すれば訳せる例もいくつか見られる。以下、これらの例を検討してみる。

「……負け惜(ま)(おし)みの強い方ね。」と、女はむっと嘲(あざけ)るように言ったけれども、……（p.34）
“……你真逞能呀。”女子不高兴地嘲讽了一句。（p.17）

ここの「ように」も訳出されていないが、少し工夫すれば、“女子不高兴了，好像嘲讽似地说。”と訳すことができる。筆者の考えでは、このように訳した方がより日本語の原文に近いと思われる。とはいえ、上記の中国語訳も通じる。上記の中国語訳は「嘲る」と「言う」を一つの動詞にした上で「むっと」を“不高兴”に訳し、さらにその後に“不高兴”を副詞化する“地”をつけることによって「ように」を表現しているが、ただ、この「ように」は第１節で論じた「ように」と違い、“好像”と直訳できないことはない。したがって、上記の中国語訳で訳されていない「ように」は、中国語文脈構造の選択によるものであり、第１節で論じた「ように」とは本質を異にしているのである。

しかし、島村は宿の玄関で若葉の匂いの強い裏山を見上げると、それに誘われるように荒っぽく登って行った。（p.31）
然而，岛村来到客栈门口，抬眼一望散发出浓烈嫩叶气息的后山，就被吸引住了，随即冒冒失失地只顾自己登山去了。（p.16）

「誘われるように」の「ように」が訳出されていないが、“就像被吸引住了，……”とでも訳そうと思えば訳せる。むしろ“像”を入れた方が、原文の意味を反映しているともいえよう。しかし、『雪国』の語り手の視点は「側近視点」[3]という特殊なものであることから、訳者が中国語の小説としてより一般的な「三人称主人公視点」を用いたかったという意図があったと思われる。そのため、ここではあえて“像”を入れなかったものであろう。

雪を積らせぬためであろう、湯槽(ゆぶね)から溢(あふ)れる湯を俄(にわか)づくりの溝(みぞ)で宿の壁沿いにめぐらせてあるが、玄関先では浅い泉水のように拡がっていた。(p.51)
大概为了避免积雪，顺着客栈的墙临时挖了一条小沟，将浴池溢出的热水引到大门口，汇成一个浅浅的水潭。(p.28)

“汇成一个浅浅的水潭”は「浅い池をかたちづくっていた」というほどの意味である。ここでの主体は流れ出る「湯」であるが、中国語では「湯」を主体にして「拡がっている」に相当する訳語を当てはめるのが難しいため、文の構造を変えて、原文から発想される場面を描写する方法で訳したのではないだろうか。

3.「刺すように」という表現

本節では、その他、特別な配慮が働いて不訳となったと思われる例を検証してみよう。

「ええ。」と、うなずくはずみに、葉子はあの刺すように美しい目で、島村をちらっと見た。(p.139)
“嗯。”叶子在点头的一瞬间，用她那双尖利而美丽的眼睛睃了岛村一眼。(p.82)

日本語では、「刺すように美しい目」は不自然ではない。おそらく「刺すようだ」という表現が形容詞的に用いられることが多いためであろう。また、日本語の「刺す」には「感覚器官を強く刺激する（例：臭気が鼻を刺す)」というような意味もあり、日本語の「刺す」は感覚的なニュアンスをもたらしやすいとも考えられる。しかし中国語の「刺す」に相当する“刺”“扎”“穿”などの言葉には、感覚的なニュアンスはない。中国語に“刺眼”という言葉はあるが、これは「刺すような目」ではなく、「目が刺されるようだ」、すなわち「まぶしい」という意味である。

『雪国』では、「刺すように」は葉子の目に対する固定表現となっており、葉子の目を描写する時にのみ4回も用いられている。「刺すように美しい」という言葉をそのまま中国語にあてはめても意味が通じにくいことと、繰り返し使用されていることから、通じやすい表現を翻訳の際に選んだのかもしれない。

しかし葉子はちらっと刺すように島村を一目見ただけで、ものも言わずに土間を通り過ぎた。(p.58)
但是，叶子只尖利地瞅了岛村一眼，就一声不吭地走过了土间。(p.33)

彼女もとっさに仮面じみた例の真剣な顔をして、刺すように燃える目でこちらを見た。(p.123)

刹那间，她像戴着一副假面具似的满脸严肃的神色，用熠熠的目光尖利地对这边睃了一眼。(p.73)

葉子はあの刺すように美しい目をつぶっていた。あごを突き出して、首の線が伸びていた。(p.182)
叶子紧闭着那双迷人的美丽眼睛，突出下巴颏儿，伸长了脖颈。(p.109)

最後の例では、葉子は目を閉じている。そのために「刺すように」が訳出されていないと理解できるが、「刺す」は中国語の語感では「美しい」と結びつきにくいため、訳者がいっそのこと「刺すように」を省略してしまったのではないかとも考えられる。

第2章 「ようだ」と「そうだ」

『雪国』には助動詞「ようだ」と「そうだ」が多用され、「ようだ」は53例、「そうだ」は19例にも達している。『広辞苑』[4] によると、「ようだ」は主に「比況」、「婉曲」、「推定または不確実な断定」などの意味であり、それに対して、「そうだ」の主な意味は「推量」、「伝聞」である。

『雪国』では、だいたい「ようだ」が“仿佛”“宛如”“活像”“犹如”等と訳され、「そうだ」が“看上去”“可能”“恐怕”“快要”等と訳されているが、しかし、「ようだ」と「そうだ」が共に“好像”“像是”“似乎”と訳されている場合もある。これは、「ようだ」と「そうだ」の本質的な違いは何なのか、中国語ではその違いをどのように翻訳すべきであろうかといったような問題を提起しているといえよう。本章では『雪国』の日本語原作とその中国語訳のデータをふまえて、この問題について考察してみたい。

1.「ようだ」、「そうだ」と“好像”

深い雪の上に晒した白麻に朝日が照って、雪か布かが紅(くれな)に染まるありさまを考えるだけでも、夏のよごれが取れそうだし、わが身をさらされるように気持よかった。(p.160)

この引用の中国語訳は次のとおりである。

晨曦泼洒在曝晒于厚雪上的白麻绉纱上面，不知是雪还是绉纱，染上了绮丽的红色。一想起这幅图景，就觉得好像夏日的污秽都被一扫而光，自己也经过了曝晒似的，身心变得舒畅了。(p.95)

これは、島村が自分の縮を織子の土地で「雪晒し」している光景を思う時の心理表現である。中国語訳では、「……考えるだけでも、夏のよごれが取れそうだ……」が“觉得好像夏日的污秽都被一扫而光”に訳されている。“好像”は用いているが、しかし、ここの“好像”は“觉得”と連用しているので、その意味は比喩ではなく、島村自身の感覚的推測だと断定できるのである。「そうだ」は“觉得好像”であるが、“好像”だけなら、「ようだ」となる。

窓のガラス戸はしまっていた。それは汽車のなかから眺めると、うらぶれた寒村の果物屋(くだものや)の煤(すす)けたガラス箱に、不思議な果物がただ一つ置き忘れられたようであった。(p.88)
玻璃窗紧闭着。从火车上望去，她好像一个在荒村的水果店里的奇怪的水果，独自被遗弃在煤

烟熏黑了的玻璃箱内似的。(p.51)

これは島村が駒子と別れるときに、島村の目線から見た待合室の中の駒子についての描写である。この描写のなかで、「ようであった」は比喩として用いられているので、“好像”と訳されている。

流れに沿うてやがて広野に出ると、頂上は面白く切り刻んだようで、そこからゆるやかに美しい斜線が遠い裾まで伸びている山の端に月が色づいた。(p.89)
沿着河流行驶不多久，来到了辽阔的原野，山巅好像精工的雕刻，从那里浮现出一道柔和的斜线，一直延伸到山脚下。(p.52)

これは島村が車窓を通してみた風景であり、ここの「ようで」も“好像”と訳されている。中国語訳では、“山巅”は被喩辞であり、“精工的雕刻”は喩辞であるので、直喩の形式を取っている比喩表現であることが分かる。

一般的に、外国人は「そうだ」も「ようだ」もみな“好像”の感じで取り扱いがちである。しかし以上の日本語原文と中国語訳を対照してみると、「そうだ」が感覚的推測であるのに対して、「ようだ」はオーソドックスな比喩であり、推測の意味合いがその中に含まれていないということが浮き彫りになった。“觉得好像”と“好像”は「そうだ」と「ようだ」の本質的な差異をよく表しているといえよう。

2.「ようだ」、「そうだ」と“像是”、“似乎”

次に、両語が共に“像是”と訳された例を検討するが、「ようだ」を“像是”に翻訳した例は4例あり、「そうだ」を“像是”に翻訳した例は1例ある。「そうだ」の例から見てみたい。

「駒ちゃん、これを跨いじゃいけないの？」
澄み上って悲しいほど美しい声だった。どこかから木魂が返って来そうであった。(p.58)
“驹姐，可以从它上面跨过去吗？”
这是清彻得近乎悲戚的优美的声音。像是从什么地方传来的一种回响。(p.32)

ここの「そうであった」は島村の感覚的推測だと考えられるが、意味的には、比況にも近い。たぶんこれが原因で、ここの「そうであった」が“像是”と中訳されているわけだが、しかし、“像是”は本質的に比況や不確実な断定を意味するので、筆者個人の考えでは、“听起来好像是”と訳した方がより適切である。なぜなら、“听起来好像是”の方が感覚的推測であり、第一節で論じた“觉得好像”と本質的に共通しているからである。『雪国』には、“像是”と訳された「そうであった」はこの一例しかない。この点から見ても、ここの「そうであった」は比較的特殊であるということが分かる。

しかし彼女の口振りは、まるで外国文学の遠い話をしているようで、無慾な乞食に似た哀れな響きがあった。(p.44)

听她的口气，像是在谈论遥远的外国文学，带着一种凄凉的调子，同毫无贪欲的叫化子一样。(p.24)

ここの「まるで……ようで」は直喩用法の典型的な形であり、中国語訳の“像是在谈论遥远的外国文学”はこの部分に当たる。文中の「彼女」は決して外国文学の遠い話をしているわけではないので、これはただの比喩表現であり、島村の感覚的な推測ではないということが明らかである。

尚岸(むこうぎし)の急傾斜の山腹には、萱(かや)の穂が一面に咲き揃(そろ)って、眩しい銀色に揺れていた。眩しい色と言っても、それは秋空を飛んでいる透明な儚(はかな)さのようであった。(p.120)
对岸陡峭的半山腰上开满了芭茅的花穗，摇曳起来，泛起耀眼的银白色。虽说白得刺眼，可它却又像是在秋空中翱翔的一种变幻无常的透明东西。(p.71)

駒子の激しい呼吸につれて、現実というものが伝わって来た。それはなつかしい悔恨に似て、ただもう安らかになにかの復讐を待つ心のようであった。(p.128)
随着驹子的激烈呼吸，所谓现实的东西传了过来。那似乎是一种令人依恋的悔恨，也像是一颗只顾安然等待着复仇的心。(p.75)

風によって眩しい銀色に揺れている萱の穂が「透明な儚さのようであった」と表現されているのは、前例と同様に比喩である。「秋空を飛んでいる透明な儚さ」は完全に日常性を失った文学的表現であり、比喩性が非常に高い。中国訳もその文学性を保つように、比喩表現“像是”でそれを翻訳している。２段落目の引用における「安らかになにかの復讐を待つ心」も、その中国訳の“像是一颗只顾安然等待着复仇的心”も、また同様な比喩表現だといえよう。

わらじ履(ば)きで、なかには饅頭笠(まんじゅうがさ)を背負ったのもあって、托鉢(たくはつ)の帰りのようだった。(p.165)
她们穿着草鞋，其中有的背着圆顶草帽，像是化缘回来的样子，……(p.98)

これは「ようだ」の最後の１例であり、島村が汽車に乗り、もう一つの町で下りた時に、尼僧が二人づれ三人づれと前後して橋を渡っている光景を見ていた場面である。中国語訳の“像是化缘回来的样子”は島村の観察による判断ではあるが、はっきりと断定できないので、用法として「ようだ」が持つ「不確実な断定」に当たる。したがってこの意味では、この例は前の三例と違う意味合いを持っている。「ようだ」は「比喩・比況」のほかに、また「不確実な断定」の意味に用いられるのである。

実際、これと似た情況は“似乎”にもあてはまる。「ようだ」を“似乎”に翻訳した例は3例あり、「そうだ」を“似乎”に翻訳した例は２例あるが、それぞれ１例ずつ例をあげて検討してみよう。

そして後には、車輪の音よりも葉子の声の余韻が残っていそうだった。純潔な愛情の木魂(こだま)が返って来そうだった。(p.124)
尔后，叶子的声音似乎比车轮声留下了更长的余韵。这是荡漾着纯洁爱情的回声。(p.73)

ここで“似乎”を使うのは“觉得”、“感觉到”等の感覚動詞と同じく自分自身の感覚を表している。すなわち、島村は自分自身の感覚から出発して事態について推測しているのである。日本語原作には「そうだった」が二度も使われているが、もし中国語訳も同じく“似乎”を二度使用すれば、構文上の問題が生じてしまう。したがって、二つの「そうだった」が一つの“似乎”に圧縮されたのだと考えられる。

> そういう話相手に飢えていてか、夢中でしゃべっているうち、根が花柳界出の女らしいうちとけようを示して来た。男の気心を一通り知っているようでもあった。(p.22)
> 也许她正渴望着有这样一个话伴吧，所以津津乐道。谈着谈着，露出了烟花巷出身的女人的坦率天性。她似乎很能把握男人的心理。(p.10)

これは、島村が駒子の言動から下した「不確実な断定」と見てよいだろう。要するに、以上の２例にも、感覚的推測と不確実な断定の差異が認められるのである。

感覚的推測と不確実な断定の間には上述のような差異があるが、似ているのも事実である。両者の区別については、現在形の場合にはほとんど同様だと思われる。しかし過去形の場合には、現在の感覚に基づく感覚的推測は用いられず、不確実な断定しか使えなくなる。これが両者の区別であろう。

３．話者自身にも用いられる「ようだ」

「ようだ」は話者自身にも用いられる。しかし、「そうだ」は話者自身には用いられず、ここにも両語の差異が見られる。

> 飛びかかって吸いついたような勢いでありながら、島村はふわりと温いものに寄り添われたようで、駒子のしていることに不自然も危険も感じなかった。(p.167)
> 驹子就像被吸引住似的猛扑了上来，岛村觉得仿佛有一种温暖的东西轻轻地贴近过来，因而他对驹子的这种举动并没有感到不自然或者危险。(p.100)

> その火の子は天の河のなかにひろがり散って、島村はまた天の河へ掬い上げられてゆくようだった。(p.180)
> 这些火星子迸散到银河中，然后扩展开去，岛村觉得自己仿佛又被托起漂到银河中去。(p.107)

この２例の中国語訳は共に“觉得”という感覚動詞を用いている。しかし、いずれも感覚的推測とはいえない。なぜなら、「ようで」と「ようだった」の訳語として、それぞれ“觉得仿佛”と“觉得自己仿佛”が用いられているからである。「ようで」と「ようだった」はいずれも比喩表現なので、もともとは“仿佛”だけで充分それらの意味を訳出することができる。それでは、なぜここの“仿佛”の前に“觉得”が付け加えられているのだろうか？ 筆者の考えでは、原文の「ようで」と「ようだった」が話者自身に用いられているのがその原因である。もしそれらが話者以外の対象に用いられる場合なら、“觉得”を付け加える必要は全くなくなるであろう。

4．不訳の「ようだ」

「ようだ」の中国語訳にはまた10例以上の不訳があり、「動詞＋ようだ」がその主な形式である。それでは、「ようだ」不訳の原因は何であろうか？

「似たようなものでしょう。年増（としま）にはきれいな人がありますわ。」と、うつ向いて素気なく言った。その首に杉林の小暗い青が映るようだった。(p.32)
“都差不多吧。在中年人里倒有一个长得挺标致的。”她低下头冷淡地说。在她的脖颈上映出一抹杉林的淡淡的暗绿。(p.16)

これは島村と駒子の会話中の描写であり、その中の「ようだった」が中訳されていない。“在她的脖颈上映出一抹杉林的淡淡的暗绿。”は純文学的表現であるので、描写性が非常に高い。描写性が高ければ、比喩性も高い。訳者はまさにこの高い描写性のことを考えて、「ようだった」を訳さなかったのだと考えられる。

そのほの暗さのために、まだ西日が雪に照る遠くの山々は、すうっと近づいて来たようであった。(p.64)
暮色苍茫，从那还在夕晖晚照下覆盖着皑皑白雪的远方群山那边，悄悄地迅速迫近了。(p.36)

これは寝転んでいた島村が、胸の底まで冷えるような寒さに目が覚めて見た光景である。山が近づいて来たように感じるのは、目覚めたら夕暮色が垂れてきて、ものの遠近感が一瞬分からなかったためである。これも前例と同様に描写性の高い表現である。ここの「ようであった」が不訳となっているのも、その高い描写性のためであろう。

「失礼ね。きょうだいじゅうで、一番苦労したわ。考えてみると、私の大きくなる頃が、ちょうどうちの苦しい時だったらしいわ。」と、ひとりごとのようだったが、急に声をはずませて、……（後略）(p.119)
“问得多失礼啊。姐妹中我最辛苦了。回想起来，我长大成人时，正好家境困难。”她自言自语地说过之后，又突然提高嗓门：……（後略）(p.70)

この一段は島村が駒子に裁縫ができるかどうかを聞いた時の駒子の答えである。「ひとりごとのようだった」が中国語訳の“自言自语”に当たる。“自言自语”は中国語では固定した四字熟語なので、その前に“好像”を入れることは当然できない。

以上、「ようだ」の不訳を３例見てきたが、描写性の高い表現と固定表現が不訳になりやすいことが明らかになった。もちろん、不訳の原因はすべて高い描写性と固定表現にあるわけではない。事実、比喩・比況よりも不確実な断定の方に不訳が集中しており、これは、「ようだ」の不訳がまた『雪国』の特殊な「側近視点」[5] と密接にかかわっていることを示しているのである。

第３章　オノマトペ

『雪国』にはオノマトペが多用されており、全部で240例数えられる。崔釜氏はかつて「中日两语量词用法分析」[6] と題する論文で“发达的拟声词、拟态词是日语的特点之一。”（発達した擬音

語と擬態語は日本語の特徴の一つである）と指摘しており、『雪国』のオノマトペについて考察している者として、筆者は全く同感である。

240例のオノマトペのうち、擬音語が19例あり、擬態語が221例ある。中訳する時には、擬音語は２例が副詞に変えられているが、ほかの17例はそのまま擬音語で対応されている。221例の擬態語のうち、146例が副詞に、33例が形容詞に、21例が動詞に、10例が数量詞に、２例が擬音語にそれぞれ変えられており、そのほかに９例の省略もある。

オノマトペの中国語訳の特徴として、“一”を含む訳語が多いということがまずあげられる。合計30例あるが、そのうち、擬態語が25例、擬音語が５例あり、全体の12.9％を占めている。

1．擬音語＋“一声”

“一”を含む擬音語の訳例にはまた明確な特徴があり、すべて「音(“地”)＋“一声”」という語構成を取っている。

「ほっといて頂戴。」と、小走りに逃げて雨戸にどんとぶっつかると、そこは駒子の家だった。(p.149)

“别管我！”驹子急匆匆地逃脱开，咚地一声碰在挡雨板上。那里是驹子的家。(p.88)

「どんと」は“咚地一声”に翻訳されている。白石大二著『擬声語・擬態語慣用句辞典』[7]によると、「どん（と）」は二通りの意味を持っており、一つ目は「㊀擬音。①物や、楽器や、体などを、打ったりたたいたりして出す音。②鉄砲や大砲などを打ったり、花火を上げたりして出す音。」であり、二つ目は「㊁擬音・擬態。①音を立てたりして、ぶつかって。強く突いたりして。②ぶつかったりして、動けなくなって。③体当たりに。じゅうぶんに。」である。㊁の①に【(壁に)どんとぶつかる】という例文もあげられている。

一方、中国語訳の“咚”は擬音語である。『汉语大词典』[8]に、“象声词。老舍《二马》第二段十二：‘李子荣咚的一声站起来，颇有点自傲的神气。’杨沫《青春之歌》第一部第十九章：‘罗大方悄悄走到卢嘉川身边咚的给了他一拳。’”とある。“象声词”はすなわち擬音語の意である。以上の例文が示しているように、“咚”は勢いよくぶつかった音であり、そして“咚”は「dōng」という発音なので、発音的にも日本語の「どん」に近い。日本語「どん（と）」の適切な訳語だといえよう。

島村は寝息の温(ぬく)みに押し返されるように、思わず表へ出ようとしたけれども、駒子がうしろの戸をがたぴししめて、足音の遠慮もなく板の間を踏んで行くので、……(p.150)

岛村像是被一股温暖的鼾声推了回来，不由得要退到外面，驹子砰地一声把后门关上，无所顾忌地踏着重重的脚步，走过木板间。(p.89)

『日本国語大辞典』[9]によると、「がたぴし」は「造りが悪かったり、古くなったりした木造の家具、建具などの立てる音を表わす語。」という。郭華江著『日汉拟声词拟态词词典』[10]はさらに「がたぴし：(坚硬物之间多次相碰发出的声音) 咯嗒咯嗒，哐啷哐啷。がたぴし：比“がたぴし”语感稍强。」と、「がたぴし」との比較を通して「がたぴし」の意味を解釈している。以上の解釈によって、「がたぴし」はスムーズな音ではなく、数回摩擦する音であるということが分かるわ

けだが、しかし中国語訳では、この「がたぴし」が“砰地一声”に翻訳されており、意味が上述の日本語の原義から外れているのである。

擬音語としての“砰”は『汉语大词典』が説明しているように、暴風雨や落雷および器物の落下やぶつかりや破裂などに多用される語なので、「がたぴし」の訳語としては不適切である。“砰”よりも“咯吱咯吱”の方が妥当であろう。“砰”はもともと西洋風の開閉ドアが強く閉められる際に発する音であり、日本家屋の引き戸は構造上このような音を出すことができない。この部分は、訳者が日本家屋の引き戸を正しく理解していなかったことに起因する誤訳であるといえよう。正確な翻訳は高度な語学力だけでなく、時にはまた外国文化に対する正確な理解を必要としているわけである。

以上見てきたように、訳語が適切か不適切かの問題はあるけれども、「音声(“地”)+“一声”」という語構成は終始一貫している。ここにはもちろん、四字リズムや回数の“一”も数えなければならないといったような中国語の特徴が見られるが、何よりも“一声”が日本語の擬音語が持つ一過性や素早さをよく表しているところに、日本語と中国語の巧みな対応が認められるのである。

2.“一”+動量詞

動量詞は量詞の一つである。『現代中国語総説』[11]によると、量詞は名量詞、動量詞、時量詞に下位分類することができるという。動量詞は動作の量や回数を表すもので、専用のものと借用のものに分けられている。専用の動量詞には“次”、“下”、“遍”、“回”などがあるが、借用された動量詞には以下のような三種類がある。①身体部分の名称を借用した動量詞：看一眼、喝一口、踢一脚。②動作に用いる道具を借用した動量詞：放一枪、砍一刀、打一鞭子。③動詞自身を重複させた借用動量詞：说一说、想一想、歇一歇、换一换。

『雪国』のオノマトペがこのような動量詞に翻訳された例は全部で12例見られる。

> 栗をぶっつけられても、腹をたてる風がないので、駒子は束(つか)の間(まいぶか)訝しそうであったが、ふいと折れ崩れるように縋(すが)って来て……(p.122)
> 岛村虽然挨了一把栗子，可也没有生气的样子。驹子顿时觉得有点奇怪，一下子软瘫瘫地靠在岛村身上：……(p.72)

『日本国語大辞典』によると、「ふいと」は「行為、動作が思いがけなく突然であるさまを表わす語。ふと。急に。にわかに。ふいっと。」という。中国語の“一下子”もほぼ同様な意味で、二つの語はともに「突然性」を表しているのである。

> 「ええ。」と、うなずくはずみに、葉子はあの刺すように美しい目で、島村をちらっと見た。(p.139)
> “嗯。”叶子在点头的一瞬间，用她那双尖利而美丽的眼睛睃了岛村一眼。(p.82)

「ちらっと」については、『日本国語大辞典』は「①動きや程度がわずかであるさま、動作が素早いさまを表わす語。わずかに。②特に、一瞬に、あるいは、わずかに見聞きするさまを表わす語。」と説明しており、飛田良文・浅田秀子著『現代擬音語・擬態語用法辞典』[12]はまた「ちら(っ)、

小さいものが素早く動いて見える様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。『と』が付いて、述語にかかる修飾語になる。『ちらっ』は勢いを加味した表現。」と説明している。要するに、「ちらっと」は動作が瞬間的で速いことを表しているわけだが、中国語訳はこの意味を踏まえて、「ちらっと」を“一眼”に翻訳している。

島村は駒子の聞き違いに思い当たると、はっと胸を突かれたけれど、目を閉じて黙っていた。(p.156)
岛村猜想驹子准是误会了，不由得大吃一惊，他闭上眼睛，一声不响。(p.92)

「はっと」も「ちらっと」と同様、動作の素早さと突然性を表している。そして、中国語訳はまた「“一”＋動量詞」の語構成で「はっと」を翻訳している。『中国語大辞典』[13]は“一”という字について、「動詞または動量詞につけて、動作が速く瞬時にあるいは突然に行われることを表す」と説明しており、この説明からも分かるように、動量詞が持つ素早さや突然性は主にこの“一”に由来しているのである。

3. “一个个”の対応

中国語の量詞は視覚的であるが、日本語のオノマトペは擬音・擬態の両義を合わせ持つ場合がある。このような場合、視覚的な量詞はそれらにどう対応するのだろうか？

どんどん助け出してるんだあ。活動のフィルムから、ぼうんといっぺんに燃えついて、火の廻りが早いや。(p.172)
正一个个地往外救呐。来电话说是电影胶片呼啦一声烧着了，火势蔓延得很快。

映画のフィルムから火が出たとか、見物の子供を二階からぽんぽん投げおろしたとか、……(p.179)
火灾是因为电影胶片着火引起的啦，把看电影的小孩一个个从二楼扔下来啦，……

子供なんざあ、二階からぽんぽん投げおろしてるんだってさ。(p.172)
听说人们正把孩子一个个从二楼往下扔呢。(p.102)

以上の３例では、原文ではそれぞれ「どんどん」、「ぽんぽん」、「ぽんぽん」が用いられているのに、中国語訳では同じく“一个个”で対応されている。この“一个个”はもともと“一个一个”の省略であり、“一个一个”の語構成は“一Ｂ一Ｂ”である。崔釜氏は前掲の「中日两语量词用法分析」で“一Ｂ一Ｂ”の機能について、

可以表示“逐一地”“一个接一个”以及“数量之多”等意。(「いちいち」、「つぎつぎ」及び「多量」などの意を表すことができる。)

と指摘し、その上でまた次のような例文をつけている。

山坡上忽然轰轰响了几声，冒起一柱一柱的黑烟。／山の斜面から突然轟音が響き渡り、斜面の上に次々と黒い煙の柱が立った。

ここの“一柱一柱”は“一柱柱”に置き換えられる。“一柱柱”は“一BB”の構造であるので、崔釜氏はさらに次のような“一BB”の例文を付け加えている。

一根根原木顺着流水往前淌，像一支舰队在前进。／一本一本材木は流水にしたがって、前方に流れていき、まるで艦隊が進んでいるようである。

以上の２例では、量詞は物によって違うが、「つぎつぎ」という語感は全く同じである。それでは、日本語の「どんどん」、「ぽんぽん」、「ぼんぼん」はどうであろう？『日本国語大辞典』では、それぞれ次のように説明されている。

「どんどん」　次々に続いて、威勢のいいさまを表わす語。多く、ものを言う形容として用いる。ぽんぽん。

「ぽんぽん」　次々に引き抜くさまや、次々に投げ出すさま、また、次々に飛び出るさまなどを表わす語。

「ぼんぼん」　次々に勢いよく投げ出すさまを表わす語。

『雪国』の原文は「子供をつぎつぎと投げ落とす」という意味なので、中国語訳はまさに「つぎつぎ」という様相を重視して翻訳しているが、ただ、もともとの意味が一つしかないので、訳出された中国語も一語だけになった。この点では、日本語と大いに異なっている。

実際に、このような、日本語原文は複数の単語だが中訳されると一語になる例は以上だけではない。陳士昌氏はその論文「日中両語におけるオノマトペの対照研究」[14] で次のような例をあげている。

①おれの目の黒いうちは、経営についてがたがた言わせないぞ。(唠唠叨叨)
②あのおかみさんは朝から夜までご亭主にがみがみ小言を言っている。(唠唠叨叨)
③月末になると、女房が金のことでとかくぐずぐず言い出すのでやりきれない。(唠唠叨叨)
④何をいつまでもぐちゃぐちゃぐちをいっているんだ。(唠唠叨叨)

①～④の「がたがた」「がみがみ」「ぐずぐず」「ぐちゃぐちゃ」は中国語に訳されると、みな「唠唠叨叨」になるのである。

⑤夜遅く客を連れて帰ろうものなら、女房にぶーぶー言われてしまう。(嘟嘟囔囔)
⑥陰で今更ぶすぶす文句を言ってもだめですよ。(嘟嘟囔囔)
⑦あの老人は外を歩く時でも、口の中でなにかぶつぶつつぶやいている。(嘟嘟囔囔)
⑧そんなことをぶつくさ言っていないで、さっさと仕事にかかったらどうだい。(嘟嘟囔囔)

⑤～⑧の「ぶーぶー」「ぶすぶす」「ぶつぶつ」「ぶつくさ」は中国語に訳されると、またすべて“嘟嘟囔囔”になる。

以上の８例はすべて「どんどん」「ぽんぽん」「ぼんぼん」と同様な傾向を示している。中国語

訳はすべて日本語語彙の基本的な意味をふまえて翻訳しているので、もちろん誤訳ではない。しかし、日本語語彙が本来持っている感覚的で繊細な差異を訳出できなかったのも事実である。実際、これは中国語だけの問題ではない。英語[15]やフランス語[16]についても、同じことがいえる。したがって、①～⑧の日本語擬態語に対する中国語訳の対応を見ると、われわれは逆に日本語擬態語が持つ感覚的な繊細さを意識し、擬態語が繊細で美しい情緒を追求する『雪国』のなかで不可欠の大役を果たしていることを確認することができるのである。

注

1）山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院、2001年３月。
2）『SNOW COUNTRY』（TRANSLATED BY EDWARD G. SEIDENSTICKER, FIRST VINTAGE INTERNATIONAL EDITION, FEBRUARY 1996）でも、この５例の「ように」は直接英訳されていない。５例のうち、不訳が３例。原文にない内容を付け加え、「比況」として意訳したものが２例。
3）李国棟・張雲「『雪国』の日英対照研究――感覚性の増減」、『広島外国語教育研究』No.10所収。
4）新村出編『広辞苑』第五版。岩波書店、1998年11月。
5）同３）。
6）崔釜「中日两语量词用法分析」、『日语学习与研究』（1989年第６号）所収。
7）白石大二著『擬声語・擬態語慣用句辞典』東京堂出版、1982年４月。
8）羅竹風主編『汉语大词典』漢語大詞典出版社、1986年11月～1993年10月。
9）『日本国語大辞典』小学館、1972年12月～1976年３月。
10）郭華江編『日汉拟声词拟态词词典』上海訳文出版社、1990年10月。
11）北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編、松岡榮志・古川裕訳『現代中国語総説』三省堂、2004年６月。
12）飛田良文・浅田秀子著『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂出版、2002年９月。
13）大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』角川書店、2003年６月。
14）陳士昌「日中両語におけるオノマトペの対照研究」、『広島大学教育学院紀要』第40号第２部所収。
15）李国棟・宗近倫子「『雪国』の感覚性研究――英訳との比較を通して」、『広島外国語教育研究』No.11所収。
16）鈴井宣行「小説『雪国』に見られる『擬態語表現』――日本語とフランス語の表現の比較」、『創価大学別科紀要』No.17所収。

付記

『雪国』からの引用は、すべて岩波文庫2003年３月改版の川端康成作『雪国』による。その中国語訳は、人民文学出版社2002年１月出版の葉渭渠訳『雪国』による。

本論の分担については、第一章は武内真弓、第二章は趙英来、第三章は何薇である。論点の設定、論証過程の調整、結論の分析など論文全体の統括は李国棟である。

ABSTRACT

The Japanesque Expressions of SNOW COUNTRY and Its Chinese Translations

Guodong LI
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University
Wei HE
Yinglai ZHAO
Mayumi TAKEUCHI
Graduate School of Letters
Hiroshima University

This is the fourth paper in a series of studies on SNOW COUNTRY, written by Yasunari Kawabata. In this paper we research deeply on the Japanesque expressions used by Kawabata.

There are some "ように (youni)" in SNOW COUNTRY which cannot be translated directly into Chinese. For example,

「そう？」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないで手をひくように階段を上って行った。

山袴の腰をひょいと捻って、娘が稲の束を投げ上げると、高くのぼった男が器用に受け取って、扱くように振り分けては、竿に懸けていった。物慣れて無心の動きが調子よく繰り返されていた。

「……私酔ってる？」と、倒れるように鏡台の両端をつかまえて覗きこむと、しゃんと裾を捌いて出て行った。

These "ように (youni)", which are underlined in the above three quotations cannot be translated directly into "好像". Why is this? We propose the reason in this paper.

In addition, we analyze the difference between "ようだ (youda)" and "そうだ (souda)", considering the Chinese translations of Japanese aspects, and as a result we found a lot of Japanese linguistic factors in these expressions. Of course, these Japanesque expressions in SNOW COUNTRY are very helpful for foreigners trying to understand the essence of the Japanese language. Likewise, the Chinese translations are also beneficial for Japanese attempting to understand the characteristics of Chinese.